った、一ランク上のテーマでの勉強を実施したかったのですが、新任職員のためには、基礎的な学習が必要ということもあって、その差異がかなりあり、埋めることが難しかったのだと思います。

職員連協の反省を踏まえ、業務・経験年数等関係なく、一人の社協職員として参加できるように、また何の軋轢も生じないよう有志で今の研究部会が発足しました。

◎取り組んできたテーマ

この研究部会発足の当初は、地域福祉時事研究会という名前で、一九九六年の八月現在で例会回数百回を迎えました。最近行った例会では、「ふれあいのまちづくり事業」が変化してきているということで、その事業を実施している市町村社協や大阪府からの状況等を聴き勉強会を行いました。「社協のあり方研究会」という組織が全社協の中ででき、大阪府下の社協からもその会に所属していたこともあって、「社協のあり方についての中間報告」をもとに様々な分野職種の各参加者から社協について勉強会を行ってきました。内容は「社協の生き残り論」「本来の社協の姿」「有償サービス」「社協の置かれている現在の状況」などなどでした。そういったそれぞれの思いをまとめ全社協の「社協のあり方研究会」に伝えました。しかしその後、最終報告は出されませんでした。

一九九〇年ごろには、デンマーク型の在宅福祉が格段と注目されてた時期ということもあって、デンマークをとりあげました。その時は、デンマークに視察に行かれた方を招いての講演会という形で勉強会を実施しました。

◎関西社協コミュニティワーカー協会発足の経緯

社協の新基本要綱が論議されているときには、当然自主研究会でも論議を重ねました。特に素案の段階では、「住民主体」という言葉が含まれていなかったということがありましたので。会員がそれぞれ資料を読んで、内容を把握してきて、疑問点等を持ち寄って論議を行いました。東京都の狛江市の社協職員の方や東京都社協の森本氏（現熊本学園大学助教授）に来てもらって講演を聴いて一緒に勉強を行いました。平成四年には「第一回基本要綱を考える社協職員の集い」を開催しました。その際、自主研究会と兵庫県にあったコミュニティワーク研究会と中心になって企画・運営し、基本要綱について全国から百人以上集まった参加者で討議を行いました。その結果を要望書としてまとめて、全社協に提出したのですが、結局この「第一回基本要綱を考える社協職員の集い」が契機となって、今の「全国社協職員のつどい」につながってきました。同じくこれを機に関西社協コミュニティワーカー協会が発足しました。

本当は、せっかくここまで盛り上がったので、「自主研究会で新基本要綱を作ろうではないか」という動きがあったのですが、結局自分たちなりの基本要綱を作ることができませんでした。これは今でも残念に思っています。

≪関西社協職員コミュニティワーカー協会大阪研究部会の今≫

◎研究会の現在の活動状況

現在三九名の会員がいます。その会員に対しては例会に参加しても、しなくても必ず会員全員に資料が届くようになっています。どうしても例会に参加する人が特定されてきますので、毎月一回（第一土曜日）のその例会でどういう内容でどういったことが話されているのかといったことをまとめてニュースとして、発足当初から発行しています。様々な事情で、参加が難しい会員のために研究部会とつながりを保つ一つになればと思っています。資料だけよりも、会員がどのような意見を発言したかなど分かると、自分も仲間という意識がもてるということもあって、ニュースを発行しています。また、そうすることによって結束力も高まるのではと思っています。

現在、賛助会員が二名います。いずれも研究者です。大阪府立大学の牧里先生、桃山学院大学の加納先生です。

現在は、毎月第一土曜日の午後六時三十分から九時に例会を行っているのですが、以前は土曜日が休みのところが少なかったので、午前中仕事が終わってからの午後二時から五時まで行っていました。そのうち、土曜日がほとんど休みになったのですが、色々と雑務等があるということで、今の時間帯になりました。

◎運営委員会にて運営

この組織を運営する運営委員会は現在九名いて、大阪府社協から二名、他は市町村社協からとなっています。発足当初から、都道府県社協が指揮をとってするよりもということで市町村社協職員が運営委員長をしています。第三月曜日午後七時から大阪府社協で運営委員会を実施し、例会のテーマなど決めています。以前は一年間通して、基本的に同じテーマで、例会をしていたのですが、最近では社会情勢がめまぐるしく変化するので、そういったことは難しくなってきています。

一九九六年度は、社協の基本となる「住民の生活実態や生活課題」を正確に把握することにつながるような研究活動を活動方針の柱の一つとしています。特に「小地域ネットワーク活動」について社協が目指すものを事例等を用いて、個別の課題解決に向けて社協がどう取り組んでいくかの検討も行いました。

例会の実施方法としては、レポートを出してもらって、そのことについての学習会と、公開学習会、交流合宿、学習発表会を行っています。レポート

は社会と社協を取り巻く問題や状況についての「時事レポート」、会員が取り組んでいる事業の状況や行き詰まっていることや研究していることなどについての「会員レポート」、色々な立場の人からの様々な意見の「外部レポート」となっています。公開学習会は就職して二～三年までの職員を対象として新規会員の開拓もかねての学習会です。交流合宿は他府県の職員との交流を目的とした宿泊学習会です。これは一九九二年から毎年実施しているもので、最初の年は静岡県、愛知県、滋賀県の職員の方々と交流会を実施しました。その現地に出向いていっての現地研修会でした。静岡、兵庫県は自主研究会が存在していたので、その方たちと協力して一泊二日の研修会を行ってきました。また、自主研究会の組織がない所については、活発に動いてくれる方に中心になって協力をしてもらってきました。せっかくこういう交流が生まれたということで、大阪と兵庫の研究会の会員が中心となって話し合った結果、一九九四年十二月に関西社協職員コミュニティワーカー協会に協力していこうということで、現在の組織に改組しました。

◎自主研究会を続ける意義

この自主研究会では、日常の担当業務以外のことを知ることができることや、経験年数に関係なく対等の立場で意見交換ができるなどが意義と言えると思います。また、若い職員が育ってきている印象も持っています。人の話を聞いていくうちに、自分自身の意見をレポートにまとめ発言できるようになってきています。ただし、会員が一部の市に偏ってしまっていること、中堅職員の参加が少ないという状況がありますので、そういった点は解決していきたいと思っています。

◎社協職員に求められる資質・技量と学習活動のありよう

「好きこそものの上手なれ」という気持ちが大事だと思います。やはり好きでないと、上手にはなれませんから。大変なこともありますが、やはり私は社協が「好き」という気持ちがあるからがんばれてると思っていますので、これからもその気持ちだけは大事にしていきたいです。それから社協職員は夢やロマンを現実にできると思います。「地域を耕す」という言葉のように、自分の思いめぐらす理想の地域に、長い時を費やしてでもそれに近づけることができます。それには、技量よりもそのことへの熱い想いが必要です。やはり体当たりしていかないと「地域」は変わりません。また、「見えてますか住民の姿」「聞こえてますか住民の声」このことを常に自分自身に問いかけること、またその姿勢を守って生きたいと思います。

〈連載〉社協サポーターに拍手喝采

第7回目となったこの企画、これまで市町村社協の理事や評議員の立場で、社協活動を支えていただいている方々に思いの丈を語ってもらいました。

今回は、筑後市で、理事、民生委員、行政区長、校区福祉会会長と様々な形で関わりを持ってある太田黒一彌（かずひろ）さんにご登場していただきます。太田黒さんは、昨年10月に結成された、ねたきり老人を抱える家族の会「コスモスの会」の会長でもあり、実際に介護をされた経験を持っておられます。

この7回目は、「コスモスの会」の会長の立場から熱い想いを語っていただきました。

〝悩み〟という字の「凶」の部分を取り除けるような、そんな家族の会づくりを目指したい……。

Q1　家族の会づくりへの思い立ちはどんなことからでしたか。

A　私は、ねたきりの母親を抱えていました。その母は一昨年の五月に九十二歳で亡くなりましたが、母が亡くなり、介護の手がはぶけた今、思うことは「介護者を孤立させてはならない」ということです。

また、心の支えとなってくれる人とは一体だれか、という点では「介護者同士」、「介護者と介護経験者」、「親身に支えて下さる保健婦さん」ではないかと思います。

当時は、孤立無援の中で介護を続けておられる人たちが集まり、気がねなく話し合える会をつくり、介護にあか

りを持って頑張って、互いに励まし合い、助け合い、また細やかな願いを社会に訴える会ができたらなという思いで一杯でした。

この時期に市社協の中山氏から相談がありました。

筑後市内の「ねたきり老人を抱える家族の会」づくりに協力してもらえないでしょうかと。

そして、平成六年の六月二十五日、社会福祉協議会主催のもと、家族の会づくりの準備会が行われたのです。その内容としては「家族の会(仮称)」づくりについての経過と考え方の説明、「家族の会」のあり方についての話し合い、その他として、介護を通しての自己紹介などが行われ、結論として「家族の会」をつくろう、ということになったわけです。結成に向けてはまず、準備委員の選出を行い、八名の準備委員が協力し合って発会に向けて取り組みを進めました。

その中では、関係機関である〝福祉事務所、保健婦、民生委員会、老人ホーム、老人保健施設、在宅介護支援センター〟などへの協力も取りつけました。

そして、平成七年の十月八日に、ねたきり老人を抱える家族の会「コスモス」が発足したわけです。会員は二十四人。

Q2 では、コスモスの活動についてくわしくお聞かせ下さい。

A 高齢化社会にあって、どの家庭にも介護の問題が身近なものとなってきています。もし、自分が「ねたきり」や「一人暮らし」になったら、という不安や、両親がそうなったらという介護者の立場からの不安は、だれもが感じることではないかと思います。

そして、そんな時「だれが助けてくれるだろうか」という課題が迫ってきます。そういうことから、先程も話しましたように、この会は悩みを抱えている介護者あるいは介護経験者の人たちの集まりで、議論・理屈を闘わす会ではなく、「そうですか」、「ああ、私もそんな経験あります」という会であり、介護で学んだことを語り合うと同時に、よりよい介護はどうあるべきかを考える「勉強会の場」でもありたいと思っています。

ですから、これまでは、各福祉機関から講師を招き、福祉制度について知識を深めたり、また視察研修などの取り組みも行っています。

定例日は毎月第二日曜日で、社会福祉協議会の事務局がある、総合福祉センターにて開催しています。

現在では、介護者の「リフレッシュの場」にもなっているように感じます。

Q3 ご自身も介護の経験があられるとのことですが……。

A ある日、こんなことがありました。

草取りをしていた母に、「ばあちゃん、草取りやめんね。転んだらどげんすんの、オレが取るけんよかばい」と私は言いました。それから、ある朝のこと、「お父ちゃま!お父ちゃま!助けて」悲痛な叫びに眠りをさまされ、とび起きて母の部屋に行ったが部屋にいないのです。「助けて、助けて!」叫び声は家の外、戸を開けて外を見れば、隣のA君が堀の土手から母を助け上げているところでした。

A君がいなかったらと思うとゾッとします。

この出来事は、私たちが寝静まっている間に、母が草取りに出かけた折のものです。

あのとき、「草取りやめんね」ではなく、「一緒に取ろうね」とか、「草ば取ろうごたっ時は言わんね」――こう言っていたらと悔やみました。

それ以来、母は内にこもり、私たちは行動に注意をはらっていかざるを得ない状況となったのです。

ここから介護生活が始まり、一昨年の五月に亡くなるまで四年余り介護を続けてきました。亡くなったというよりも、みんなが見守る中、「天寿をまっとうした」といえると思います。

一時は家庭崩壊の一歩手前までいったこともありましたが、それが救われたのは多くの方々の励ましとご教示、真心のこもった支えがあったからだと思っています。

私は妻と共に、母が入院して亡くなるまでの約百日間、ほとんど毎日病院に通いました。

病院の待合室で同じ境遇の人たちとの会話の中で、それぞれの境遇の立場の中で懸命に光を求めて努力されている姿に接する時、我が家だけでなく、様々な計り知れない悩みがあることを知ったのです。その中のいくつかをあげますと……

○家族や身内の協力が得られない。あしろ、こうしろいちいち指導だけする(言うばっかり)。

○悔やみ話しをする相手がいない。

○自由に外出ができない。

○支出が多く、経済的に苦しくなる。

○介護に疲れて、体の調子が変になる。

○勤めを休まざるを得ない、辞めざるを得なくなった。

○家庭が崩壊状態になった(私たちも全くそのとおりでした)。

など悩みはつきないといった状況でした。

その時、……といいますか、母を介護する中で感じたことは、人は孤独には耐えられるが、孤立には耐えられないという、究極の人間心理への理解が必要ではないかということを感じたものです。「とにかく心の支えがほしい」この思いが、会づくりに対して私が積極的に協力していきたいという気持ちになった一番の要因だったような気がします。

ですから、コスモスは、まずもって介護している人の心のより所となることを主眼に置きたいと考えています。

Q4 なるほど。では、会が結成されて一年と少しが経過したわけですが、会員さんたちからはどんな声

があがっていますか？

A　ちょうど一月に会員の人たちを対象にアンケートをとりました。

その中の「これまでの活動の中で、よかったことはどんなことですか」という質問に対しては、

○介護者の友達ができたこと
○会員同士の交流（定例会での話し）
○専門家を招いての学習会
○介護に関わるビデオ学習
○施設見学
○会報の発行
○介護者リフレッシュふれあい旅行
○食事を交えての交流会
○他の市町村の家族の会との交流会

以上のようなことがあげられました。

この答えを見る限りでは、介護者の「心のより所」という点での役割は果たしつつあるのではないかという気がしています。

全体的な感想としても「気分的に自分自身明るくなった」ということで一致していますしね。

Q5　最後に、ご自身も含め、会員の人たちは、今後どのようなコスモス会づくりを目指していかれるのでしょうか？

A　やはり、何度も申し上げてますように、どんなことでも言い合える会づくりというのが基本にあります。

それを踏まえた上で、同じく会員にアンケートをとり、今後の在り方や活動への期待について考えてみました。

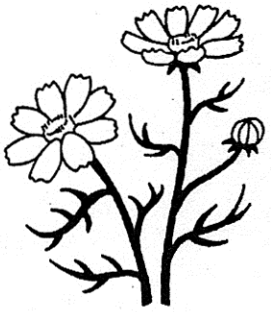
主なものをあげてみますと、

○人の目を気にしないで言いたいことを言い合える場を継続したい。
○この会を知らない人に、もっと知ってもらい、介護人の負担の軽減に一役買えれば…。
○介護の研修に加え、それ以外の会員間の交流を大切にしていきたい。
○この会に参加したいが、参加できないという人もいるようだ。その理由などを聞き、それを解決するための取り組みを考えていきたい。

以上、すべて会員の人たちからの意見ですが、私も同じ考えです。

このコラムは「社協サポーター」を紹介するコーナーと聞いてましたが、このコスモス会は、社協をサポートするのではなく、社協と対等の立場で、物事を考えられるような自立した会にしていきたいと思っています。

そして、「悩み」という字の中の、「凶」の部分を少しでも取り除くことができる会づくりに取り組んでいきたいと思います。



フリートーク

道

赤池町社協　中野　雅浩

今も忘れない。あれはわたしが小学校四年生の二月十四日、初めて竹刀を握った日である。母は、野球少年だったわたしを無理やりに道場へ連れていき、よろしくお願いします。」との一言。

わたしもその場の状況に流されたかのように「お願いします。」と小さな声でつぶやく。

その時は、これから汗と涙の厳しい剣道生活が始まることを知る由もなかった。

初めは楽しいはずの練習が、時がたつにつれて厳しい練習へと変わっていく。そしていつの間にかその道から逃れられなくなってしまった自分を感じた。

今までに、三度退部させられたが、その度に両親を連れて謝りに行ったものである。

しかし、今考えるとぞっとする。厳しい練習のため、血尿まで出る地獄のような場所になぜ戻ろうとしたのだろうか。自分のプライドのため？それとも運命？さて、何故なのかは今も分からない。

しかし、その経験が後に大きな自信となったのは事実である。

剣道では、多くの術語や用語があり、その言葉がわたしにとって社会（特に社会福祉）で生きていく大きな糧になった。

・先先の先
・間合
・残心
・枕のおさえ
・遠山の目付
・止心
・不要の要

などなど数えきれない術語や用語がある。ここに書いた七つの術語の一つ一つに道としての意味があり、人生としての教訓が隠されていて、社会福祉の仕事においても根本的な支えとなった。

最後の「不要の要」は、大学の恩師野田八段範士から聞かされた言葉で、一見不要に見えることも、実はたいへん重要な役割りをしていることがたくさんあるということである。

たとえば、数十メートルの断崖で道幅が数センチの場所を自転車で行けるだろうか。道幅が五メートルだったらどうだろう。本当は、轍（わだち）の幅だけが必要なわけであるが、回りのの空白がなければ前にはとうてい進めない。

何の役割もしていない道幅の空白が実は大変重要な役割をしている。

このことは、社会生活や社会福祉を進めるうえにも当てはまる。

私たちは、生かされていること、そして世の中に仕事をさせてもらっていること（需要のない仕事は成り立たない。）を肝に銘じて社会福祉の仕事に携わる必要があるのではないだろうか。

小学校四年生の二月十四日初めて竹刀を握った日。それは、母から私への甘くて苦い人生最高のバレンタインチョコレートだったのかもしれない。

「サラブレッドと私」

前原市社協　水崎　浩幸

久しぶりのフリートークなので、何を書こうかと迷っていたところ、仕事のことではあまり面白味がないので、現在私が〝ハマ〟っている趣味といいますか、日常生活の一部になってしまった〝競馬〟について少し書こうと思います。

我が福ブロにも競艇、パチンコ、麻雀など様々なギャンブルにお詳しい諸先輩方がいらっしゃり、私もその影響というか煽りを〝モロ〟に受けたのか受けなかったのか、とにかくこの道に足を踏み入れてしまいました。（決して福ブロの先輩方に原因があると言っているんじゃありません）本題に入りますが、競馬をはじめたころは、ただ新聞を買って「この馬で間違いなし！」と書かれた馬券を買っていましたが一向に当たりませんでした。何度も失敗し失敗をかさねいろいろ研究していくうちに競走馬にも人間と同じようにその日の体調、調教のやり方、血統、またその日騎乗する騎手の性格、得意な乗り方などさまざまなものが一つになった時に初めて一着でゴールできるのだそうです。このことが理解できた時にはもう膨大なと言ってはオーバーですが、とにかくたくさんの資料に囲まれて情報収集に明け暮れる日々を送っています。

ここで少し競走馬「サラブレッド」について紹介しますと、ダービー、ジャパンカップ、有馬記念などG1レースと言われる最高峰のレースに出走できる馬は五つの要素を全て兼ね備えていると言われます。①血統②スピード③スタミナ④底力、最後に一番大切な勝負根性の五要素です。このうちいずれの一つが欠けても一流とは呼ばれないし勝つことができないのです。

私は意外なことに気が付いたのですが、この五要素と私たち社協マンには共通点があるのではないでしょうか。①の血統はまったく関係ありませんが、②のスピード（住民のニーズに素速く対処できる行動力）③④のスタミナ、底力（住民の幸せのために数々の難問に対してもあきらめず、粘り強く解決の糸口を探しあてる力）、最後に⑤の勝負根性（他の機関のどこにも負けないぞと思う社協マン魂）です。強引に結びつけた気もしますが、少しは仕事のことも書かないと「まなこ」の質が落ちたと言われそうなので書いておきます。

話が横道にそれたのか、どれが本題なのか、なれない原稿書きなので支離滅裂になってしまっていますが、競馬の奥の深さ、面白さに取り付かれ完璧にハマっている今日このごろです。

ちなみに現在の勝率はかんばしくありません。どなたかお詳しい方がいらっしゃったらご指導下さい。

ボランティアフェスティバル大阪に参加して

三橋町社協　津留　雅秀

ある日、C市社協のN氏より電話があり、いやな予感がした。というのも、彼がまなこ編集委員であることを知っていたからである。で、原稿締め切り日までは時間があるので、「あ、よかよ。」と言ってしまった。しかし、日がたつにつれて、これだと思う材料がない。そこで、苦しんだあげく、九月に大阪の全国ボランティアフェスティバルに参加したときのことで原稿を書くことにした。

全国レベルの大会は初めての参加とあって、緊張の中で現地大阪に向かった。会場は、宿泊地から、JR環状線に乗って十分程度のところにあり、あくる朝、人込みの中の電車に乗って行ったが、あの人なつこくもあり、荒っぽい「ナニワ」の独特の雰囲気の中に、なんとなく、違う空気を感じた。案の定、私の乗っていた車両の人たちもかなり駅で降りられた。全国から来られたボランティアの参加者である。

私は、オープニングの会場へ足を運んだが、さすが、大都市での開催とあって、開会式会場の大阪城ホールの大きさには度肝をぬかれた。式典には、八千人もの参加者の中で華やかに行われた。開会式前の緊張感の漂う会場を一遍に和ませてくれたのは、数十名の地元保育園児の歓迎セレモニーであった。関係者のあいさつ、来賓あいさつの後、盲学校卒業後八〇年に結成したメンバーによるバンド演奏で会場はいやがおうにも盛り上がった。

この後、各分科会場へ移動。あいにくの天気で、屋外イベントは中止ではあったが、四十四もの分科会や、講座で熱心に議論、研究をされたようだ。私の参加したシンポジウムでは、「新発見ボランティアロード」と題して、日

曜大工ボランティア活動、配食ボランティア活動、国際交流ボランティア活動、子どもを支えるボランティア活動の四つの活動が紹介された。日曜大工のボランティア活動は、大阪市の実践で、福祉、医療、住宅に関する専門家による小規模住宅改造のボランティア活動。配食ボランティア活動は、東京品川区の企業がもつ人的豊富な特性を生かした、昼休みの時間を利用した配食活動。地域に根差した国際交流ボランティア活動は、神奈川県綾瀬市の取り組みで、難民施設がある地域性の関係で、国際色を生かした子どもたちへの学習ボランティア活動。子どもを支えるボランティア活動は、東京世田谷区の取り組みで、深刻ないじめの問題を前に、命の大切さを訴えることを根底にもった、子どものサポートシステムづくりのためのボランティア活動であった。それぞれに、タイプの違う活動を紹介されたわけであるが、ディスカッションの中で、特に印象に残ったことは、「文明の力で便利になってしまったけれども、このままでは、人類は生存できないだろう。地域を外から見たら、空気の層が非常に薄いのがよく分かります。二千二年より様々な人六人を六ヶ月間、宇宙船で住まわせる実験をします。よっぽど人間同志がうまくやっていかないと持たないでしょう。だから、これからの科学者は、徳の高い人でないとだめですよ。」と宇宙センターの所長さんの話をされたことだ。これを聞いてドキッとした。ホント、今の科学の進歩による弊害を科学者の立場でつかれたのだ。これからは、便利になればなる程、人間同志のつながりが大事になってくるということだ。人の力は、いつの世でも大きい。この大会の底に流れるテーマに通ずるものを感じた。

ヤッパ、所詮この世は人なんですね～。

日々の中から～雑感～

北野町社協　野瀬　光治

私は、家事のこともあり工業高校を卒業しすぐに三重県鈴鹿市にあるH会社へ就職した。当時、鈴鹿市はあまり開けてなく田の真中に寮があったことを思いだす。バイク七五〇cc（通称ナナハン）に乗っていた頃又、サーキット観戦をしていた頃が頭に甦る。そのH会社を都合により退職し、現在の社協に入ったのが二十四歳の時であった。社協とは、どういう仕事をしなくてはいけないかまったくわからないまま入社した。時がすぎて今、感じていることは、社協には、いろいろな人がおとずれる。福祉の為に役立てて下さいと香典返しの寄附やバザー等の一般寄附金を持ってこられる方とか。また、うつむきかげんにいろいろな事情があってお金に困ってます？いくらか貸して下さる制度はありますか？あるなら貸して下さいませんか。又、その隣りでは、ボランティアが悩みやこれからの活動などを話している。その隣りでは立寄った住民が歓談している。まだ、当社協は行政の一部を間借りしている状態で、狭い事務所は我々職員がちょっと席をはずしていると座る場所もない状況にある。しかし、このような多くの住民が立ち寄って頂けるということは、社協としてお客があってこそはじめて存在できることを再認識する必要があるのではないでしょうか。住民が社協を作り、社協を使うものだということをまず職員が再認識して、弱い立場にある方、悩みのある人が、気軽に利用できる社協を作りあげることが急務と思っている。でも仕事が忙しい時などそのようなことを忘れ感情が入り実現できないことが多分にある。

又、これからの福祉はむずかしくなる。介護保険の導入だ。やがて導入されようとしている公的介護保険の実現でのサービスのむずかしさ。法人や医療法人、シルバーサービス等との本格的な競争時代に入ることになりそうだ。これから我々職員一丸となり福祉サービス充実の為、頑張っていきたい。

新人紹介　明日花咲け

添田町社会福祉協議会　原　康彦

経験年数　三カ月

特技趣味　読書

メッセージ

平成八年十月より添田町社会福祉協議会専門員として社協に勤務、まだ日も浅く現在勉強させていただいております。

昨年七月、城をイメージして造られたふれあいの館「そえだジョイ」が開館しました。この施設は高齢者福祉や障害者福祉サービスの拠点として町が建設したものです。

その施設の運営を添田町社会福祉協議会が受託、子供からお年寄まで利用できる福祉施設として、大変好評をいただいています。

平成八年度社協事業計画に基づき高齢者の在宅福祉サービス事業などの推進に努力していますが、経験のない仕事が多く各団体の関係者に迷惑をおかけしています。一日も早く福祉活動ができるよう勉強したいと思いますので、よろしくご指導をお願い致します。